

小説 上田ながの

挿絵 藤処

立ち読み版



女騎士エルザの復讐

終わりのない娼婦淫獄

終章	六章	五章	四章	三章	二章	一章	序章
無残	復讐	淫獄	媚薬	日常	娼婦	エルザ	殺意

221	205	171	119	081	042	011	006
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

## 登場人物紹介

Characters



### エルザ=リードヴィツヒ

女でありながら、誰からも認められる騎士を目指す少女。皇帝主催の剣術大会で優勝し、最高位の騎士を示す「白銀聖騎士」の称号と、すべての偽りを見抜く宝剣「聖白銀の剣」を手に入れた。勝気な性格だが、性的なことに関しては消極的。



### ガロード=ランサ

エルザの剣の師であり、一緒に屋敷で暮らしている。かつて行き倒れかけていたところを、リードヴィツヒ父娘に救われた。

### セレブロナ=リードヴィツヒ

ガルネシア帝国騎士団の将軍を務めるエルザの父。傭兵の身分から、一代で騎士の頂点にまで上り詰めた豪傑。

一瞬怯えてしまう。

とはいえ、エルザには騎士として鍛え続けた強い心がある。恐怖を覚えつつも、それを表に出すことは決してなかった。動揺しつつも顔を肉棒から逸らすような真似はしない。

「んっちゅ……くちゅっ……ちゅっちゅっちゅっ……」

更に肉槍に口づけをする。何度も何度も啄むように口唇を龟头へと押しつけた。

（辛い……最低だ……。胸が苦しい。でも、それでも……続ける。続けるんだエルザ！）

躊躇えはそれだけ苦しみが長引くこととなる。そのことを少女騎士はよく理解していた。だから決して行為を中断したりはしない。それどころか、キスだけではなく――。

「んれろっ……ちゅろっ……れろっれろっれろお……」

舌を伸ばし、肉棒を舐めた。

氷菓子でも食べるかのように、龟头を舌で舐め回す。どこをどう舐めれば男が感じるのか？ それははっきり言ってよく分からない。だから一生懸命舐める。ただひたすら舌を蠢かせ、龟头を唾液塗れに変えていく。

「なかなかいいぞ。しかし、技術がないな。いいかいエルザちゃん。私が言うとおりに舌を動かすんだよ」

「ふあ……ふあ……」

幼いころから可愛がってきた少女に対してこのような行動を取ることができる男――ジーンに対してエルザが抱いたのは軽蔑の感情だった。けれども逆らいはしない。何故なら



ば自分は娼婦だから。だから今は耐える。耐えるしかないのだ……。

(リードヴィツヒ家を再興するまでは……)

屈辱に身を震わせつつ、ジーンが「こうするんだよ」と下してくる指示に従い、舌を蠢かせる。

ただ亀頭を舐めるだけでなく、ペニスの裏筋を舐め上げ、陰囊を啜え、吸った。肉先秘裂を舌尖でなぞる。グチュグチュと卑猥な音色を奏でつつ、肉棒全体を唾液塗れに変えていった。

やがて肉先から半透明の汁が溢れ出す。確かこれは先走り汁というものだろう。女が感じる濡れるように、男も気持ちがいいと濡れるらしい。これさえもエルザは舌で舐め取っていく。

「先走り汁を舐める瞬間って……えへへ、とつても幸せなんですよエルザ様。私でこんなに感じてくれたんだって……。女の喜びってやつですな」

ミシエルがにやつきながら向けてきた言葉が、脳裏に蘇ってくる。

(嘘つきミシエル……。全然幸せなんかじゃないぞ……)

侍女の姿を思い出すと、胸が締めつけられそうな程の切なさを感じた。

それを忘れるように「んちゆるっ……。れろっれるっ……。むちゅうう……。んふうう」ペニスを舐める。舌尖に伝わってくる先走り汁の苦みに耐えつつ、舌を蠢かせ続けた。

「はっふ……。んもっ！ もっぶ……。んじゅっ……。むじゅうっ」

更には口を開いて肉棒を咥え込むと、頭を前後に振った。

「はぶっ！ もつぶ……んぼっ！ もつもつもっ……おぼおっ」

口唇で肉茎を挟み込み、ジュボツジュボツと擦るように扱く。

「舌の動きも忘れては駄目だよ」

「こ……こふ……か？ あじゆるっ……むっじゅ……ちゅぶるっ……んっんっ……むじゅうううっ……ぶっじゅ……じゅぼっじゅぼっじゅぼっ……」

命じられるがままに舌を蠢かす。亀頭に舌を絡めながら、男は締めつけがきつい程感じるというミシエルから教えられた知識を反芻しつつ、頬を窄めてより強く肉棒を咥えながら更に激しく頭を振った。

（早く終われ……早く……早く早く……）

肉棒を咥えていると、それだけで心が碎けそうになってしまふ。この状況が早く終わってくれることだけを考え、ひたすら、ただひたすら肉棒へ奉仕し続けた。口端から唾液が零れてしまうのも気にすることなく……。

「いいぞ！ で……射精るぞ！ 射精るぞっ!!」

そのお陰だろうか、遂にジーンは限界を訴えてくる。その言葉を証明するように、口腔で肉棒が不気味な程に膨れ上がっていくのを感じた。

（で……射精そうになって……これ……射精る……）

射精を感じる。慌ててエルザは咥えていた肉棒を離そうとした。流石に口の中に射精さ

れたくはなかったから……。

「ごぶうっ!!」

だが、ジーンの手がエルザの後頭部を押さえ込んでくる。それだけじゃない。ズンッと喉奥を突くように腰を突き出してもきた。

「おっぶ! ぶぶうっ!!」

喉が肉槍で塞がれる。唐突すぎる行為。息が詰まり、苦しい。思わずエルザは瞳を見開いてしまう。

そして次の瞬間――。

ぶびゅばっ! どっびゅっ! びゅぼっ! どびゅっどびゅっどびゅっどびゅっどびゅるるるうううう!

「あぶぼっ! ぶっぶっ! あぶうううっ!!」

エルザの口腔に多量の肉汁が撃ち放たれた。

一瞬で口腔を満たす程に多量の精液を流し込まれてしまう。けれども後頭部を押さえられてしまっているのは、逃げることはできない。

「はぶっ! ごっぶ……おぼぼっ! ぶびよおっ! おっおっおっ」

ただひたすら肉汁を受け止め続けるしか、エルザにできることはなかった。

（口が……私の口の中が……臭い。臭くて……苦い汁で満たされてる。気持ち悪い。気持ち悪すぎる……）

口内に肉汁が染み込んでくる。実におぞましい感触だった。だから一刻も早くこれを吐き出したい。

「あああ、最高だったよエルザちゃん。でも、まだまだ……一回射精したくらいじゃ満足できない。もつと……もつと射精してあげるね。キミの口にたくさん注いであげるね」

(へ？ ま……まだ?)

心の中に絶望が広がっていく。

「う……うぞ?」

嘘であつてほしかった。

「嘘じゃないさ。さあ、いくよ」

が、ジーンの言葉は偽りでも冗談でもなく――。

どじゅっ！　じゅぼっ！　じゅずっ！　どじゅっどじゅっどじゅっどじゅっどじゅっ！！  
「ぼぼっ！　おっぼ！　ぶぼっ！　おっぼ！　ぶびよおおっ！　んじゅっぼ！　じゅっぼじゅっぼじゅっぼじゅっぼ――じゅぼおおお!!」

ピストンが始まった。

ただ愛撫されるだけでは我慢できない。自分の思うがままにエルザの口腔を犯したいとでもいうように、ジーンはまるで膣でも犯しているかのような動きで、喉奥に肉先を叩き込んできた。

「がぶぼっ！　ぶびよおおっ！」

(あ、当たってる。奥に……ペニスが……あだつてるう！ く……苦しい。駄目……やめで……どまつで……これ……壊れる。わだちの喉……壊れでじまう。だから……どま、どまつで……どまつでえええ！)

まるで性玩具のように顔が揺さぶられる。肉槍で突き殺されてしまうのではないか？  
と思える程に激しい蹂躞行為だった。だからやめてくれと心の中で繰り返すのだけれど、  
当然それは届かない。

結果——。

どびゅばっ！ ぶびゅっ！ どびゅっどびゅっどびゅるるうっ！

「ばぶううっ！ はぶあっ！ ごぶぶっ！ ぶふうううっ!!」

またも喉奥に肉汁を流し込まれることとなってしまった。

(また射精てる。これ……二回目なのに……す……凄い量……。駄目だ……溺れる。私……溺れてしまう。抜いて。早く……早く抜いてええ……)

口内を肉汁でいっぱいにながら、救いを求めるように上目遣いでジーンを見つめる。

「はああああ……もつとだ。もつとだよ！」

しかし、彼はエルザの苦しみなどこれっぽっちも斟酌しんしやくしてはくれなかった。

射精を終えたばかりの肉棒をより硬く、大きくたぎらせながら——。

ぐじゅぽっ！ じゅぽっ！ じゅぽっじゅぽっじゅぽおっ！

「むびよお！ おっぽ！ ぶぽおっ！」

更なるピストンを開始してきた。

（うぞ！ まだ！ まだつづぐの！！ 無理……じぬ……じんじやう……わだち……おお  
お！ じんでじまうううっ！！）

死ぬという言葉は決して比喩ではない。本当に肉槍で刺し殺されてしまうのではないかとさえ思った。だから「や……べで……ぼう……やべでえええ」と必死に訴える。

が、届かない。聞き入れてなどもらえない。

「いぞ！ いぞおおっ！！」

熱に浮かされたように、ジーンは何度も腰を振り、何度も何度もエルザの口腔に肉汁を流し込んできた。

「おつぶ……ぶびよっ……おびよおお……おっおっおほおお……」

それから一体何度口内に射精されてしまっただろうか？

その量は尋常ではなく、最早口で受け止めきれぬ程となっていた。ブクツと頬が内側から膨れ上がっている。鼻からも鼻水のように濃厚な白濁液が零れ落ちてしまっていた。

「よかったよエルザちゃん。最高だった」

そこまでしてようやく満足したのか、ジーンは遂に口腔からペニスを抜いてくれる。

「あぶあつ！ うぶえっ！ おげっ！ おげええええっ！ うげえええええ。げぼっげぼっ……げぼおおお」

途端にエルザは噎せた。何度も咳き込み、床に白濁液をぶちまけてしまう。ぼたぼたと口腔から床に向かつて何本もねつとりとした粘液の糸が伸びた。

「駄目じゃないかエルザちゃん。お客様がキミのために射精したものを粗末に扱っちゃいけない。だから……今吐き出したものを飲むんだ」

「はあつはあつはあ……の……飲む？ こ……こりえを？」

「そうだ。それも……手とかは使っちゃいけない。口と舌だけを使って飲むんだ。吐き出した罰だよ」

「な……何故私が……そ、そんなことを？」

「何故？ 理由なんて簡単だろ。キミが娼婦だからだよ。それ以外に理由はいるかな？ イヤだと言うなら、金は出さないが、それでもいいのかな？」

「う……うく……くううう……」

屈辱に身体が震える。悔しいし、情けない。

それでも、金は必要だった。だから……。

「はっじゅ……むじゅっ……んじゅううっ……ぐじゅっ……れろっれろっ……んじゅるるる……。むふううう……」

床に唇を寄せ、先程自分が吐き出した白濁液に舌を這わせた。

(不味い……苦い……気持ち悪い……)

味覚が痺れそうな程の苦みが舌先に伝わってくる。液というよりもゼリーといった方が

正しいくらい濃厚な牡汁が舌に絡み付いてくる様が不快だった。自分の舌が腐ってしまうのではないかとさえ思える。それでもエルザは舌を動かし続けた。舐め取り、飲み干す。床を自分の口で掃除するように何度も何度も……。

「頑張るねエルザちゃん。さあ、ご褒美だよ」

そうして床に這いつくばったエルザに対し、ジーンはニッコリと微笑んだかと思うと、帝国紙幣をばらまいてきた。身体に金が降り注ぐ。それを感じつつ、エルザはひたすら肉汁を舐め続けた。屈辱に身を震わせながら、それでも決して涙を流すことはなく……。

\*

「さあ、上になって腰を振れ」

ベッドに横になった客が命じてくる。

「はい……。んつく……。あああつ！ くふうううつ」

命じられるがままエルザは全裸で男に跨がると、ジュブジュブと肉棒を膣奥に啜え込んでいった。

「挿入してくれる！ んつく……。あつあつあつ……。ペニスが……。私の膣中に……」

「どうだ？ 気持ちいいだろう？」

気持ちよくななどない。不快なだけだ。

だが、それでも――。

「はい、気持ち……。気持ちいいです。お……。お客様……」

「我慢できないぞフォーロシア卿。最早責めるだけで満足などできんぞ」

「ワシもだ！」

悶え狂うエルザの姿に男達がペニスをいきり立たせる。

「もちろん構いませんよ。ただし、その女は娼婦——抱くからにはそれなりの代金をいただくことになりますよ」

ニタツとスバルガが笑った。

「挿入<sup>はい</sup>する……挿入ってくる！ あっあっ……んひああああ♥ 膣中に……私の膣中に……

ペニスが……あつふ……挿入ってくるううう♥」

会議室の床に横になった男の上に、無理矢理跨がらされてしまう。ズブズブと下から突き上げるように肉棒が胎内に挿入ってくるのが分かった。

熱い屹立で膣壁が拡張されていくのを感じる。挿入に合わせてエルザは何度も肢体を打ち震わせた。

「どうじゃ？ 気持ちいいであろうワシのものは？」

「そんな……そんなこと……」

「ほれ、ほれ、ほれえっ！」

どっじゅ！ ずじゅっずじゅっずじゅううっ！

否定はするが聞き入れてなどもらえない。それどころか、否定するエルザを黜ることに

より興奮を覚えてでもいるかのように、激しく下から肉棒を突き上げてきた。

「あふうう！ おっふ！ あ……当たる！ 奥に当たる！ だつめ……あああ！ 駄目ええ！ ひんっひんっひんんっ!!」

貴族の肉槍がエルザの膣奥を突く。ドジュツドジュツと叩いてくる。

ただそれだけで、何度も絶頂させられてしまった肉体は、すぐに快感を覚え始めてしまった。突き込みに合わせて乳房をブルンッブルンッと揺らしながら、甘い悲鳴を周囲に響かせてしまう。

「エルザ……悶える姿も実に美しい。見ているだけでは我慢などできぬな。フォーラシア卿。こちらの穴を使っても？」

「もちろんです」

新たな貴族の言葉にスバルガが頷く。

「こ……ちらの穴？ 何を……何を言っている？ 何をするつもり？」

意味が分からない言葉である。だというのに、なんだかとても嫌な予感がした。だから問う。何をするつもりなのかと。

「なにつて……もちろん……こうするつもりだよ」

この問いかけに、男は行動で答えてくれた。

勃起した肉先をグチュツと肛門に押しつけるといふ方法で……。

「おっふ！ な……そ……そこは……そこは違う。そこは違う穴だ！ 違うのに……あつ

あつ……何を……何をする気だ？ まさ……んんんっ！ あっふ……くふううう……はあ  
つはあつはあ……ま、さかあああ」

流石に男が何をする気なのか理解する。ただ、間違いであつてほしかった。

「そのまさかだよ」

だが、間違いなどということはあり得ず――。

みぢっ！ みぢみぢみぢいいいっ！！

「おっほ！ ふほおおお！ おっおっおっおっ――むほおおおおっ！」

挿入が始まる。肛門への挿入が……。

「お……おじり……これ……おじりがひろげられてぐうう！ だ……駄目だ！ やめ……  
やめろ！ やべろおおお！ こわ……壊れる。裂ける！ 尻が……わだちの……おんっお  
んっ！ お……じりがさげでじまうがら、やべで……お願い……ぬいでぐれえええ！ 死  
ぬ！ 死ぬううう！」

本来ならば排泄するためだけの器官を、異物が逆流してくる。膣と肛門。二つの穴が無  
理矢理広げられる。まるで身体が肉棒によって押し潰されていくかのような感覚だった。  
息が詰まりそうな程の苦しみを覚えてしまう。狂ったようにエルザは身悶えた。

「大丈夫。こんなことで死にはしない。寧ろ……すぐに気持ちよくなる。だから安心した  
まえ。私は女の扱いを心得ているからね」

どじゅぶっ！ ずっじゅ！ どじゅぼおおっ！

「ふひっ！ むひいっ!!」

拒絶の言葉など意味を持たない。

男達は容赦なく更に腰を突き込んでくる。違う。ただ突き込んでくるだけでは終わらない。引き抜くどころか、エルザの身体を蹂躪するかのようにピストン運動まで容赦なく開始してきた。

「おおお！ 動く！ うごいでりゅう！ 膣中で……わだひのおまんこで……おじりで……ペニス……おっおっ！ ペニスがうごいでりゅう！ これ……狂う！ ぐるっでじまううう！ やべで！ やべでえええっ！」

膣と肛門——二つの穴に挿し込まれた肉槍が交互に蠢く。肉襞の一枚一枚を擦り上げつつ、ゴリゴリと直腸を削ってきた。

肉棒が蠢くたびに、エルザの肢体は電流でも流されたかのように震える。ドジュツと膣奥を亀頭で突かれるたび、まるで全身をペニスで刺し貫かれているような感覚に襲われることとなった。息が詰まる。苦しみさえ感じてしまう。

だというのに、苦しいはずなのに……。

（んあだ？ これ……ああ……駄目だ……また、また来る！ また……来てしまう！ おっおっおっ！ こんな……最低……最低な状況なのに……また……またあああ）

男達は女を抱き慣れた貴族である。だからこそ、どこをどう責めればエルザが感じるのか？ それを最初から理解していた。



「がぼぼっ！ あぼっ！ むぼっむぼっむぼっむぼっ——おびよおおお」  
人じゃない。まるで性処理玩具のような扱いだっただ。

それを証明するように、男達による陵辱は三穴だけでは終わらない。両手にもペニスを握らされる。中にはエルザの美しい髪を肉棒に絡み付ける者までいた。太股や脇腹にも肉棒が押しつけられる。

会議室に集まっていたすべての貴族によって犯される——まさに最低で最悪としか言えない状況だった。

騎士としてのプライドがズタズタに引き裂かれていくのを感じる。將軍の娘という矜持が砕けそうになってしまう。だというのに——。

（あああ、何故？ 感じる……。感じてしまう。イヤだ……。こんなことで感じたくななどない。ないのに……。感じる……。私……。駄目だ……。抑えられない。気持ちいいのを我慢できない……。なんで？ 何故だあああ）

性感を知ってしまったっている肉体は、愉悅を覚えてしまっていた。男達の動きに合わせて、どうしようもない程に性感が高まっていく。絶頂感が膨れ上がっていく。

（イヤだ……。絶頂く……。このままじゃ私……。絶頂ってしまう。でも……。絶頂きたくない。絶頂きたくなんかない。だ……。から……。やめて……。もう……。動かないでえええ。頼む。頼むから……。お願いだからあああ）

願う。心の中で男達に許しを請う。懇願する。





♥ わだひ……まだ……まりやいぐつ！ いぎゆつ！ いぎゆつ——いぎゆうう  
うう♥♥♥

どうすることもできない性感に打ち震える。思考さえも真つ白に染まるような絶頂感に、エルザはグルンツと半分白目さえ剥きながら、ひたすら溺れに溺れた……。

\*

「おっ♥ おっ♥ おっ♥」

そんな陵辱からどれだけの時間が過ぎただろうか？

エルザは一人会議室の床に打ち捨てられていた。俯せ状態で、全身を白濁液に染めながら……。脚が蟹股に開いているせいで、潰れたカエルのようにさえ見える。

「無様なエルザ。だが、よくやった。お前のお陰で今日の連中は私の派閥についてくれるだろう。宮廷は派閥闘争というのが面倒でなあ。くくく、故に……特別にチップをくれてやろう。本来ならば渡すものではないのだが、特別だ。ほれ、受け取れ……」

またも札束の雨が降る。

実に無様だ。しかし、復讐のためにはこれが必要なのだ……。

「おふ……ほふううう……」

肉汁に塗れながら手を動かす。

必死に、必死にエルザはばらまかれた札束を手でかき集めていった……。



(ん？ 傷？)

そこで気がついた。

脇腹に酷い傷と言っていたが、特に痛みは感じない。一体どういふことだろうか？ 反射的に身体を起こし、着せてもらったと思われる寝間着を捲って脇腹を確認してみる。が、傷などまるで残っていないかった。

「本当に私は傷を？」

「ええ、もちろんよ。本当に酷い傷だった。だから、これを使ったの」

そう言つてミーナは小瓶を取り出す。

「それは……ケネールの秘薬？」

「へえ、知つているのね」

「まあ……はい……」

ケネールの秘薬——現在帝国内で流通している傷や病を治す秘薬の中では最高級の部類に入るものだ。平民は当然、貴族であつても手に入れることが難しい程高額な薬である。場合によつては死んだ方がマシだつたと思える程の借金を背負うことになりかねない……。「何故……そこまでして見ず知らずの私を？ ケネールなんていくら娼館の経営者とはいえ、きつい金額では？」

「確かにそのとおり。はつきり言つて大損だわ。でもね、あたしはケネールを使つてもなお、お釣りが来ると思つたから貴女を助けたの……エルザ||リードヴィツヒ……」

そう言つてミーナは実に嬉しそうに笑つた。

「なっ……わ、私の名を……どうして？」

「帝国最上位の騎士の証である白銀聖騎士。その称号を得た女騎士が娼婦にまで身をやつした……凄く興味深い話でね……貴女のことを調べたのよ」

そう言うときミーナは一つの水晶を取り出す。

一体なんのつもりで？ と、エルザが首を傾げた刹那、水晶が輝きを放ち、そこに一人の女——エルザの姿が映し出された。

「と、まあこんなわけだね。貴女がどんな姿をしているのかは分かっていたわけ。まあ、あくまでも戯れで調べただけなだけだよ。でも……まさかその貴女を拾うことになるとは……うふふ、あたしにも運が向いてきたということかしら」

「運が向いてきた？ それは……どういう……」

なんだか嫌な予感がし、エルザは身構える。そんな少女騎士に対し、ミーナは「うふふ」と妖艶に笑いかけてきた。

「分かるでしょ？ 貴女にはうちで働いてもらいたいの。娼婦としてね」

「ば……馬鹿な！ そんなこと……」

「貴女に断る権利はない。貴女には秘薬代を払ってもらわないといけないからね。あたしは命の恩人なのよ。それでしょ？」

「くう……」

言葉に詰まってしまふ。

「うちで働くか、秘薬代を返すか……どちらか選びなさい。まあ、貴女にそんな大金が払えるとは思えないけど……。どうする？ 秘薬泥棒として憲兵に突き出してもいいのよ」

「それは……」

そんなことになれば、たとえ敵を討てたとしてもリードヴィツヒ家を再興することができなくなってしまう。

「く……ううう……」

選択肢はなかった。

(……ここは娼館。ということとは色々な人間が入り出す。つまり……ガロードに関する情報だつて得られるかも知れない。そう、情報収集……。それに、復讐のためにはやはり金がいる。食事をするにも、宿に泊まるにも金が……。だから、働けるなら働くべき。行き倒れてしまうようでは、敵討ちなんかできはしないから……。そう、これは復讐のためガロードを斬るために必要なことだから……)

言い訳のように心の中で自分に言い聞かせる。

「わ……分かった……。私も騎士だ……。命を救ってくれた借りは返す……」

「ふふふ、流石騎士様。潔いわね。そういう子……嫌いじゃないわよ」

エルザの返事に、ミーナは実に嬉しそうに笑った。

(問題ない。前にも男には抱かれた……。だから何ともない……。そう、何ともない……)

前と同じことをする。ただそれだけだ——と、考えることで、エルザは最悪の状況を受け入れようとすする。

しかし、以前エルザが所属していたのは貴族や大富豪相手の高級娼館。今回の娼館とは違う。そのことをエルザはすぐに思い知らされることとなる……。

\*

三日後——。

(こんな……こんな屈辱……)

娼館ゴールドパピヨン——そのエントランスホールには、巨大なステージが用意されていた。ポールが立てられたステージが……。

そのステージ上にエルザは一人立たされる。胸や下半身を僅かに隠す、踊り子のような姿で……。胸の谷間が、引き締まった括れが、剥き出しとなった格好だった。しかも、シヨーツを穿くことは許されていない。少しでも動けば、秘部が見えてしまいかねない程に際どい服装である。とはいえ、それでも全裸ではないのだが、それさえもあくまで最初だけの話でしかない。

何故ならば——。

「これから貴女には毎晩競りに出てもらおうわ。白銀聖騎士エルザ——貴女は我が娼館の目玉娼婦。だからね、貴女の値段はお客様に付けてもらおう。商品である貴女を直接確認してもらった上でね。舞——ポールダンスを舞いながらのストリップショーという形でね」

などというミーナからの指示が出ているからだ……。

ステージの下には大勢の客が集まり、エルザを見つめている。

「おい……あれ……本当にエルザ||リードヴィツヒだぞ」

「マジかよ。白銀聖騎士が娼婦？　ぶはっ……すっげ」

「出す！　俺は金を出すぞ！　破産したって構わねえ。絶対エルザを抱く！」

彼らの視線は実にギラギラしたものだった。

舐め回すように見つめられると、なんだかそれだけで自分が汚されていくような気さえしてしまう。あまりに屈辱的な状況だった。

けれど逃げるわけにはいかない。ガロードを殺すまでは……。

ギリッと唇を噛み締めた後、エルザは娼館内に奏でられ始める音楽に合わせて舞を舞った。腰を淫らにくねらせ、自分で自分の乳房を揉み、唇を舌で舐めるなどという男を挑発するような舞を……。

ステージの上を立てられたポールに股間を押しつけるようにして、腰を振るなどという行為までさせられる。

意識を取り戻してから今日までの三日の間に、ミーナから教え込まれたものだ。あまりに扇情的な舞い。恥ずかしさで頭が沸騰しそうになる。

けれども、決して動きを止めはしなかった。ここで舞いを舞うことをやめたところで、この娼館から逃れることはできない。金を返すまでという条件で聖白銀の剣を奪われてし

まっているからだ。あの剣を手放すわけにはいかない。それに、借金のことでは憲兵に通報されてしまうかも知れないのだ。

だからエルザは舞う。苦しみを早く終わらせるために、男達を挑発するように……。

もちろん、ただ舞うだけじゃない。ストリップショーという言葉どおり、曲に合わせながらエルザはただでさえ露出度が高い衣装を、一枚一枚脱いでみせていった。

ブラのようなトップスを外し、乳房を露わとする。身に着けている意味などほとんどないんじゃないかという程に、面積の小さな秘部を隠す前掛けのような部分を自分から捲り上げる。その状態でしゃがみ込むと、脚をM字に開き、太股をポールに絡ませながら、男達にピンク色の肉花弁を見せつけるように腰をクイッククイッと幾度も幾度もくねらせてみせた。

羞恥で白い肌がピンク色に染まっていく。全身から汗が溢れ出し「はあはあ」と息が荒さを増していった。

この様を見て、男達が「よし！ 300000ガルだ！」「いや、俺は400000ガル出すぞ！」「500000だ！」次々とエルザに対して値を付け始める。まるで家畜に値段を付けていくかのように……。

（私は……ただの商品か……。この私が……。父上の……將軍セレブロナの娘である私が……こんな……こんな……）

激しく胸が痛む。あまりに大きすぎる屈辱に、涙さえ零れ落ちてしまいそうだった。た

だ、それでも実際泣いたりはしない。何故ならば、泣いてしまえば本当にどうしようもない程リードヴィツヒの家名を傷つけてしまう気がしたから……。

だから耐える。何を言われようと、どんな扱いをされようと、ひたすらエルザは耐え続けた。

「200000!!」

「へえええ……。200000000ガルド……。いいわ。落札よ」

やがて本日の客が決まる。

エルザを買ったのは禿げた頭のブクブク太った親父だった。ただ、200000000ガルドといえば大金である。それなりに金を持った親父ではあるのだろう。とはいえ、顔は脂汗塗れであり、服もよれよれである。どこか小汚さを感じさせる男だった。

正直不快である。こんな男には抱かれたくない。イヤだ。イヤだ……。と本能的に感じてしまうような相手だった。

ただ、それでも（もう……。このステージからは下りることができ……。）そう思うと少しばかり心がホッとする。大勢の男達の視線からは、一刻も早く逃げたかった。

だが――。

「ではお客様。好きなように抱いて下さい。エルザを」

「ああ、分かっている」

顔いた男がステージに上がってくる。何故か服を脱ぎ、痛々しい程に勃起した肉棒を晒

しながら……。

「ど、どういうことだ？ 何故ここで裸になる？ へ……部屋に……どこかの部屋に行くんじゃないのか？」

意味が分からなかった。どうして？ なんで？ 疑問ばかりが脳裏をよぎる。

「どういうこと？ そんなの……この状況を見ていれば分かるでしょ。この場でセックスしてもらうのよ……エルザ」

「な……何故だ？ こんな所でなんて……おかしいだろ！」

「おかしい？ そんなことないわよ。だって……お客様達には競りに参加する段階から代金をいただいているんですもの。貴女を競り落とせなくても、見て楽しめるようにね。だから……たっぷり皆さんを満足させてあげるのよ」

娼館の主は見た目の美しさとは裏腹に、どこまでも残酷な女だった……。

「さあ、自分で挿入れるんだ。俺のちんぽをそのまんこに挿入れるんだぞ」

ステージの上に男が仰向けに横たわる。勃起した肉棒を天井へと向けるように……。

「く……ううう……」

そんな男を見つめつつ、エルザは唇を嚙んだ。

はい。分かりました——と、簡単に頷くことはできない。

何故ならば周りにはギンギンに瞳を見開いた男達の姿があるから……。

逃げたい。逃げ出したい。こんな男に自分の身体を捧げたくなどない——が、選択肢はなかった。この状況から逃れる術など存在しない。

(復讐のためだ……。ガロードを斬るために……。そう、斬る。殺す……。殺す殺す殺す殺す殺す……。必ず殺すっ!!)

屈辱や羞恥を殺意で塗り潰していく。

そのような殺意を抱えつつエルザは男の身体に跨がると、じゅぶつ……。じゅぶぶぶぶううつと腰を下ろし、男のペニスを肉壺で啜え込んでいった。

ストリップショーによって興奮してしまったのか？ はたまた男達に抱かれることに慣れてしまったせいだろうか？ 既に肉壺からは愛液が溢れ出してしまっている。我ながら実に情けない。とはいえ、お陰であっさり肉棒を啜え込むことができてしまう。

「はっぐ……。くふっ……。んふううううっ！」

(は……。挿入ってくる。ペニスが……。こんな男の醜いものが……。私の……。あああ……。私の腔中に挿入ってくるううう)

肉槍によって腔壁が拡張されていくのを感じた。身体が汚物によって侵食されていくかのような錯覚さえ……。

「おおお、マジ挿入っつく」

「羨ましいなあ……。おい」

「しかし、手慣れた挿入だな。白銀聖騎士とはいっても……。どうやらやりまくってるみた



いだなあ」

そんな光景を大勢の男達に見られてしまっている。

まさにこれ以上ないというくらい、屈辱的な状況だった。

できることならばすぐにでも行為を中断したい——けれどもそれは許されない。

（もつと……もつと奥まで挿入れないと……。せめて……苦しみが長引かないように……早く終わらせるために……）

少しでも羞恥と屈辱を感じる時間を短くするために、ズブズブと更に肉棒を咥え込んでいった。自分で自分を汚していくかのように、ドジュツと先端部が子宮口に触れる程膣奥にまで……。

「あふっ！ くふううっ」

（当たる。奥に……私の奥にペニス当たるっ！）

子宮口と亀頭がキスをするのが分かった。ビクンツと電流でも流されたかのように肢体が震える。それと同時に、散々肉棒の味を覚え込まされた肉壺が、精液を搾り取ろうとするかのようにキュツと収縮した。

「おおおお！ すげえ締めつけだ！ これ……挿入れた……挿入れたばかりなのに射精る……射精るぞ！ おおお！ 射精るううっ!!」

瞬間、まだ挿入したばかりだというのに男が限界を告げてくる。膣中で亀頭が不気味な程に膨れ上がっていくのが分かった。

「あ……なっ！ 射精する？ 駄目だ！ 射精すな！ 膣中は……膣中は駄目だあっ」

早く終わらせたいとは思っていたものの、女を抱き慣れた貴族達ではあり得なかった反応に驚いてしまう。ただ、驚きつつも肉棒を膣から引き抜こうとした。もう二度と膣中射精などされたくはない。

「おおお！ 射精すぞ！ 射精すっ!!」

だが、男はそれを許してはくれなかった。両手を伸ばしてエルザの腰を掴むと共に、ズドジュツと膣奥を抉るように腰を突き出してきた。

「くっひいっ！」

子宮が肉棒によって圧迫される。一瞬視界が白く染まった。

刹那――。

ぶびゅばっ！ どびゅっ！ どびゅっどびゅっどびゅっどびゅっ――どっびゆるるう！  
容赦ない射精が始まった。

「あああ！ で、射精てる！ 膣中に……私の膣中に熱いものが……ドクッドクッて……そんな……そ……んなああああ……」

ドクドクと痙攣する肉槍から溢れ出す白濁液が、下腹部に広がっていく。自分の胎内を、女として最も大切な器官を、好きでもなんでもない男の汁で満たされてしまう。

（こんな……こんなことって……こんな……どうする？ もし……もし妊娠してしまったら……こんな男の子を……私は……私はどうすれば……父上……お父さん……）

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル！

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！  
かなり過激なライトノベル！

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラブ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

# キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

うるし原智志  
FCT  
天海麗乃  
カクユウ

二次元  
**ドリームマガジン**  
ED DREAM MAGAZINE

今月の特集  
**異種**

偶数月  
17日発売

定価 1080 yen vol.76 06 2014

## 二次元 ドリームマガジン ED DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

06 2014 JUNE price 780 yen

COMIC UNREAL

8周年記念特大号!

表紙&ピンナップテレカ  
応募者全員サービス

CDROM デジタルコミック

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

奇数月  
12日発売

KTCといえば闘うヒロインアンソ!

**メガミグレイセス**  
MEGAMI CRISIS Vol.17

Cover Illustration  
和馬村政

Hな大冒険活劇、ついに完結!  
**雷の戦士ライディ**  
〜戦場の宿命〜

奇数月  
下旬発売

ヒロインが  
淫らに堕ちまくるアンソロジー!

## COMIC UNREAL

# メガミグレイセス MEGAMI CRISIS

詳しくはKTCの公式サイトにて! キルタイム

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!! ※いずれも18歳未満の方は購入できません。